

# 司馬遷の史記について

## 1、経緯

天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？

司馬遷は、自分の体験も踏まえながらそのことに死ぬような思いをしながら思考を重ねて行く。その結果辿り着いた結論は、自分の転職として史記を書くに全力を尽くすというものであった。彼がそういう結論に達した経過を少し詳しく見ておこう。

司馬遷は、父・談が病気のため、封禪の儀式（ほうぜんのごしき）に参加できない不運を嘆き、「ああ、これは私に与えられた天命か。俺に代って是非史記を完成させてくれ！」と言う父・談の悲痛な叫び声を聞いて、その決意をしたらしい。封禪の儀式とは、皇帝が天と地に自分の即位を知らせ、天下が太平であることを感謝する儀式である。始皇帝以前には何人もの皇帝がこの儀式を行ったと『史記』には伝えられている。秦の、始皇帝が皇帝になったのちの紀元前219年に、泰山で封禪の儀を行ったが、このとき既に古い時代の儀式の知識は失われており、儒学者などを集めて封禪の儀式について研究させたが、各自意見がまちまちでまとまらず、結局我流でこれを執り行ったと伝えられている。その儀式の内容は秘密とされており、実際に何が行われたかはよく分かっていない。前漢の第7代皇帝・武帝の時、司馬遷の父・談は、封禪の儀式の準備を命ぜられ、それに数年間没頭していたらしい。それに参加できない不運を嘆く談の気持ちはよく判る。司馬遷は、何故、父・談がそのような不運に見舞われたのか、天命に対する不審に苛まれるのである。

さらに、司馬遷にはショッキングな出来事が襲う。彼の無二の親友・李陵（りりょう）が、匈奴の戦いに敗れて捕虜となり、宮廷で糾弾される。武帝からご下問を受けた司馬遷は李陵を弁護し、武帝の逆鱗に触れて、獄に繋がれる。当時、中国では、身分の高い人が語句に繋がれた場合、処刑されることはなく、自ら身を処するのが当然と考えられていた。司馬遷は、当然、自害するだろうと周りから見られていたが、史記を完成させよという父の遺命を果たすため、司馬遷は潔く死ぬわけにはいかなかった。彼は、生き恥をさらしながら、遂に、史記を完成させるのである。壮絶な生きざまである。

白川静は、史記は「運命の書」と言う（「白川静の世界Ⅲ・・・思想・歴史」、2010年9月、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所）。白川静は、「司馬遷が運命論を展開するのは、人が運命と対決しながらも、その自己貫徹を求めて名に殉ずる生き方の是非を問うためのものである。」と述べており、そういう意味で、史記は「運命の書」と言っているのである。冒頭に掲げた「天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？」という基本的な問題を意識しながら、史記は書かれている。史記のおいて、歴史的事実、とはいっても司馬遷の創作的なものもあるようだが、歴史的事実を踏ま

えて、後世の人にも「天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？」という基本的な問題を意識してもらい、天命思想に対する思索を深めてもらおうという意図が隠されている。

## 2、政治思想としての天命思想

上述したように、史記では、歴史的事実を踏まえて、後世の人にも「天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？」という基本的な問題を意識してもらい、天命思想に対する思索を深めてもらおうという意図が隠されている。

このことに関連して、（「白川静の世界Ⅲ・・・思想・歴史」、2010年9月、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所）では、次のように言っている。すなわち、

『 中国における合理主義的な精神の萌芽は、天命思想に発している。天意は民衆を媒介として表現され、為政者が天の徳を見に修めていれば、民意の支持を受けられる。民衆の存在を自覚するこのような政治思想が天命思想である。天命思想は、古代的な宗教と政治とを切り離した。宗教に重点があった殷王朝が滅亡し、民衆を意識した理性的政治に重点をおく周王朝が興った。これが、殷周革命の思想的意味である。また、周の文化は儒家的であり、殷のそれは道家的なものに近く、この二つの止揚的に統一されるところに、中国の文化の本質がある。』・・・と。

すなわち、天命思想は古代的な宗教と政治とを切り離した。そして、それが発端になって儒教的な合理主義的な精神が芽生えてくるのでだが、本来、儒教的なものとは矛盾するものがある。それを止揚的に統一することが必要で、司馬遷はそのために史記を書いたのである。

レヴィナスによると、史記のような価値ある書籍は「無限」としての価値を有しており、それをもとに研究が進められて、宇宙の原理、それは老子の言う「道」ということであるが、それを少しでも明らかにすることが可能である。内田樹は、中沢新一との対談（「日本の文脈」2012年1月、角川書店）の中で、次のようなことを言っている。すなわち、

『 ユダヤには「脳の機能を活性化する」構造がある。例えば、ユダヤ教においては、常に「中心が二つ」あって互いに真剣な議論がされている。タルムードにはエルサレム版とバビロニア版の二つのバージョンがあるし、タルムードを研究する学院も二カ所あり、同時代に必ず二人の偉大なラビが出てきて、おたがいに激烈な論争をする。だから、一つの結論に落ち着くということがない。ユダヤ教の聖典であるタルムードは「増殖する書物」

なんです。』・・・と。タルムードと同じように、司馬遷の「史記」は「増殖する書物」としての価値を持っている。今後、司馬遷の「史記」にもとづいて大いに研究が進んで、冒頭に掲げた「天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？」という基本的な問題に対して、哲学的な思索が重ねられていくことを期待したい。

### 3、司馬遷の史記の本質

「白川静の世界Ⅲ・・・思想・歴史」（2010年9月、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所）により、司馬遷の史記の本質について説明しておきたい。

「巫（ふ）」とは神との交流を受け持つ人（シャーマン）のことで、「史」とは神との交流のために書かれた記号（書物）である。「巫」は言葉を発する。「史」は言葉を書いたものである。その違いはあるが、両者とも神との交流を目的としている。したがって、両者とも、古代における権力は大きかったのである。

「史」は祭儀の由来である神々の物語の伝承者でもあり、故事の伝承者、語り部としての一面を持っていた。春秋時代、「史」は最高の知識人として古典に通ずるのみならず、言行にも優れ、君主に訓言を与える存在であった。「巫」と「史」は、祝詞（のりと）による「祈り」を主とするものであった。「史」は祭祀儀礼や古伝承を担当したが、祭政分離が進む中、知識階層として伝承記録を掌るものとなる。春秋時代の「史」の特質として、博学と伝統の熱烈な擁護者であるとの二点が挙げられる。

ところで、日本の記紀（古事記と日本書紀）は史記の影響を強く受けているらしい。そのことについては、<http://www.geocities.jp/toryon33/kodaishi2.html> に詳しく説明されている。その研究論文では、「馬子・蝦夷・入鹿」という名称が「史記」の李斯列傳にある趙高の逸話に由来すると言っているし、日本書紀には史記・漢書・後漢書・魏志・梁書・隋書・淮南子・芸文類聚・文選からの潤色が数多く見られるので、それらの漢籍が史官たちの横にあったのは事実であると言っている。森博達（もりひろみち）の『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』（中公新書）によれば、記紀の中に中国人・続守言と薩弘恪の手になる部分が少なくないことは明らかであるという。

私は、記紀の神話編は完全に神との交流を目的にした「史」であると思う。記紀も、「史記」と同じように無限に「増殖しうる書物」としての価値を持っており、今後、記紀をもとにして大いに哲学的な思索が重ねられていくことを期待したい。記紀に関する優れた研究としては、河合隼雄の「神話と日本人の心」（2003年7月、岩波書店）がある。

なお、上記の研究論文を掲載しているホームページは素晴らしく、今後私の勉強の糧にしたい、そのことをこの際申し添えておく。

<http://www.geocities.jp/toryon33/>

## 4、私の天命論

さあ、それでは、「天命がありながら何故悪が栄えて善が割りを食うのか？」という基本的な問題について、誠に未熟ながらも、私の考えを申し述べることにしたい。

天命とは「宇宙の意志」である。これは「神の意志」と言って良い。先に述べたように、ケンブリッジ大学のスティーブン・ホーキングも、現在、私たちが見ている宇宙は「神」のような、何らかの手によって作られた設計図にしたがって作り出されたのだと言っているが、そのように考える先端的科学者は少なくない。しかし、その設計図がどのようなものであるかは、「神のみぞ知る」で私たち人間には判らない。私が思うに、その設計図には、私たち人間が社会においてとるべき具体的な行動まで書いていないと思う。私たち人間は自由である。人間社会において、私たちは自由に振る舞うことができる。ニーチェが言うように、私たちの「祈り」に対して、神は「さよう！ さよう！」と言うのみである。神は私たちの行動を束縛することはしないのである。このことに関しては、私の電子書籍「さまよえるニーチェの亡霊」に書いたので、是非、それをご覧戴きたい。

[http://honto.jp/ebook/pd\\_25249963.html](http://honto.jp/ebook/pd_25249963.html)

ニーチェは、「神は死んだ！」と言ったが、それは「キリスト教の神が死んだ」ということであって、神の存在を否定している訳ではない。むしろ彼は東洋系の神（ディオニソスの神）に憧れを持っていて、キリスト教が神の名において人間の自由な生き方を束縛するようなことをいろいろとやるから、そのことにニーチェは強烈な反感を持ったのである。神そのものは、極めて鷹揚で、私たちの「祈り」に対して、神は「さよう！ さよう！」と言うのみである。神は私たちの行動を束縛することはしないのである。そのことについては、上記電子書籍の第2章の中の「驢馬の場面」で次のように紹介した。すなわち、

『われらの神はお語りになりません。その創られし世界に対して、つねに「さよう、さよう」と言われる以外には……。このような神はその世界を讃えられるのです。口を開かぬのは、神の狡猾さであり、かくしてなかなかあやまりを犯さないのです。

……。すると驢馬は、それに応えて「さよう、さよう」と嘶いた。われわれの神は目立たぬ姿で、この世を歩まれます。灰色のからだに、その徳をつんでおられます。霊力を持っておられても、これを隠しておられます。そのためすべての者がその長い耳を信じています。……。すると驢馬は、それに応えて「さよう、さよう」と嘶いた。われらの神

が長い耳をお持ちになり、「さよう、さよう」としか言われず、決して「いや」と言われないことは、なんと深く隠された知恵でしょう！ 神は世界を、おのれのかたちに似せて、すなわちできるかぎり愚かに創られたのではないのでしょうか？・・・すると驢馬は、それにこたえて「さよう、さよう」と嘶いた。（中略）』・・・と。

神は、私たち人間に「宇宙の原理」、それは老子の「道」ということであるが、そういうものを「天命」という形で示すのみで、人間社会のことは人間に任されている。私たち人間は、天命を意識しながら、この人間社会を生きていくしかない。したがって、この人間社会には、悪人もおれば善人もいるのである。だからといって、神は存在しない訳ではないし、「宇宙の原理」や老子の「道」というものがない訳ではない。